

やり捨てされて自暴自棄になってる幼馴染を甘やかす慰めSEXで虜にして、今日こそ俺の物にしてやります

体験版

尽くしたい受け溺愛クール青年×甘やかされたい恋愛体質青年

受け：陽依（ひより）

攻め：司（つかさ）

要素：同い年、クール攻め、甘々、前立腺責め、対面座位、キスハメ、連続絶頂、ドライオーガズム

バケツをひっくり返したような土砂降りの夜。出かけるには不向きな環境が整っている中で、なぜか突然インターホンの音が鳴った。不謹慎な来客は、モニター越しでも分かるほど悲惨な顔をしながら、悲しい声で言う。

「司あ...！俺の誕生日、一緒に祝ってえ！」

画面の向こうにいる彼は、いい大人とは思えないほど服も髪もずぶ濡れだ。俺もこんな時間にやってくる非常識な濡れねずみを家に入れる趣味はないが、泣いている幼馴染を放っておけるほど非情でもない。

その幼馴染が、長年想い続けている相手ならなおさら。

扉を開けて招き入れた時、トレーナーから大量の水滴を滴らせる彼を、そのまま家の中に入れるのは勇気が必要だった。ひとまず風邪をひくからと、冷えた身体を温めるためにシャワーを浴びてもらい、その間に着替えを用意する。

20分ほどしてリビングに来た彼は、部屋に着いた時よりは血色が良くなったものの、気持ちがいまだに真っ青に見える。そして彼が悪天候の中、泣きながら俺の元にきた理由は、正直聞かなくても分かっていた。

「...で？陽依はやっぱり、振られてここに来たのか」

「そう！マジでありえないよな！？行ったら女いたし！そもそもバイって聞いてなかったし！」

「そのケーキもぐちゃぐちゃだけど」

「濡れたから仕方ない！俺が食わなきゃもったいない！だって俺のケーキだもん！俺が誕生日だから買ったんだもん！一緒に記念日過ごすつもりで買ったんだからさあ！」

深夜にあるまじき大声で泣きながらケーキを食らう男は、小さいときからの腐れ縁で、かつ俺の想い人である陽依だ。彼はなんでも好き嫌いせずに残さず食べる良い奴なのだが、恋愛体質で振られやすいという欠点を持っている。物心ついたころから付き合っては別れをかなり早いサイクルで繰り返しているわりには、一向に男選びが上手くならず、今回もまた破局に至ったらしい。

この度の彼氏とは、付き合っただけ1か月くらいだと思っただけ。というより大人になってからは、真剣に付き合うつもりがない男とも体の関係になってしまう確率が上がった気がする。だから今晚うっかり浮気現場を目撃した彼が、本当に陽依の彼氏だったかは怪しいところだ。

「したいっていうから、忙しい日だって予定合わせてエッチしてたのに！一人じゃ寂しいとか言うから、何回も会いに行ったんだよ！？いや、確かに最近ちょっと冷たかったんだけどさあ！でも誕生日くらいはって思うじゃん？」

「体よく使われてただけじゃないのか？」

「うっ、ぐすっ、やっぱ司もそう思う...？」

そして別れたばかりと言えど、陽依自身も今回の相手があまりいい男ではないと薄々気づいているようだ。だからこそ、そんな男に引かかった自分が情けないと思っているらしい。俺としてはトラブルが生じた彼とのあれこれをほじくり返す気はないが、陽依は心当たりのある出来事を思っただけか、ぐす、ぐす、と鼻をすすって目を擦っている。

ケーキを食べながら涙を流す陽依は、今日が年に一度の祝い事の日だと浮かれることはできなさそうだ。そんな彼にティッシュを渡して様子を見てみると、顔に流れる液体を片づけてから、はぁ、と大きなため息をついた。

「最終さぁ...、男は女に勝てないってことかなぁ。俺、誕生日だったのに。そんなの全然、どうでもいいってことなんだよな」

さすがにホールケーキは重かったのか、陽依は3分の1ほどを平らげてから、クリームのついたスプーンを置いた。激しく崩壊したケーキは個体としての力を失い、でろりと専用の皿の上に広がっている。元の見た目も分からないし、正直あまり美味しそうではない。それでも俺は、陽依が放棄したスプーンを手にとって、もはや残骸に近いそれを口にした。

「陽依は、俺と一緒にの誕生日じゃ不満か？」

「え...？や、嫌じゃないよ。司といれたら楽しい」

「なら、いいだろ。誕生日おめでとう。今年で25か？」

「...！そう、俺、司よりちょっと遅いけど25になった！」

気落ちした陽依の頭を撫でながら、彼に起こった不幸になるべく触れずに、ただ彼の記念日を祝う。すると陽依は、ほんの少し驚いた顔をした後、ほわりと笑った。その笑顔を見て、俺も心が温かくなる。

俺は、陽依の嬉しそうな顔を見るだけでこれほど幸せな気持ちになるのに。どうして他の男たちは、彼を泣かせてばかりなんだ。それに苛立ちはあるが、俺に

にとってこの状況は好都合でもある。いい加減、待ち続ける姿勢には飽きた。ただ横で陽依の幸せを願っているべきだと思ったが、見守っているだけでは陽依が幸せになる未来が見えない。

だから今日は、俺が彼を心の底から満たすことで、幼馴染の立場を卒業しようと思う。

せっかくだから飲むかと、酒に強くない陽依を適度に酔わせて、うつらうつらとしたところを狙った。ほんのり頬を染めた陽依はすっかり気を緩めているので、徐々に距離を詰めていく。そして完全に腕が密着したところで、若干猥談寄りの話にもっていった。

「陽依は、今日もする気であいつの家に行ったのか」

「ええ〜？そりゃそうだよ〜、誕生日エッチする気満々だったよ」

「今も？」

「今...？う〜ん、したかったけど、そういう気分じゃないかも。だけど発散できてないから、元気になったら急にしたくなるかもね」

「...じゃあ逆に、俺とヤッて元気になってみたら？」

「えっ？」

酔いと疲れで頭の回らない陽依は、俺の言葉を上手にかみ砕けていない様子だ。それでも構わず、彼の唇にキスをする。びくっ、と反射で跳ねた身体をそっと抱きしめて、少しずつ彼を押し倒した。

「んっ、ッ、え、司、や、やっ！？」

突然の出来事にひどく動揺している陽依は、この展開についていけない。俺も俺でろくな説明もせずに、サイズの合わない服のボタンを外して、陽依の上半身を裸にしていた。けれど最後の襟元のボタンに手をかけた時、陽依の手が俺の手を掴んでくる。

「や、待って！いい、いいから俺っ！」

「陽依がしたくないならいいけど。嫌じゃないなら、抱くよ。陽依のこと」

「なっ、な、なんでっ！？俺がさっき、エッチしかたって言ったから！？いって、いくら誕生日でも、司にそこまで甘えられない！」

「この際だし、とことん甘えれば？俺は落ち込んでるお前を、どこまでも甘やかしたいし」

「っ、でも、でもっ」

「嫌なこと全部、俺が忘れさせてやりたい」

彼が拒絶の態度を示した時、陽依が心の底から嫌がっているのなら、俺もここで手を引こうと思った。今ならまだ、酒の席のおふざけで終わる。でも、彼の頬が徐々に染まる理由は、きっと戸惑いだけじゃない。どうしようと思つめる目の奥に、確実に期待が潜んでいる。

甘えればいいと言ったのはわざとだ。だって俺は、彼が甘やかされるのを好むことを知っているから。こう言えば弱ったお前は、俺からの施しを受けたくなるに決まっているんだ。何年も、何回も、誰よりも、彼の愚痴を聞いてきたのは俺だ。だから俺は、陽依の描く理想の彼氏像を、彼よりも深く理解している。

震える指がボタンから離れたのが、了承の合図だった。優しく彼の手をどけて、全てのボタンを外して、前を広げる。白い肌に映える桃色の円の外側に、軽く音を立ててキスをした。すると陽依はひくりと肩を震わせて、そっと俺の腕を握ってくる。

「何...？舐めんの...？」

「舐めてもいいなら」

「う...！舐められんの好きだけど、司がやるってなると、なんていうか」

「気にせず気持ちよくなったらいい」

「は、んうっ！」

ただ、期待はしても、俺との行為に緊張している陽依はどこか顔つきも固い。だからこわばった身体を溶かすように、優しく胸に舌をつける。

もちろん、急に感じる場所だけを責めたりはしない。強引に事を進めたら、陽依が怖がってしまう。最初は優しく胸のまわりにキスを降らせて、腕を握った手をほどき、陽依の手を握ってから指を絡める。握った指を陽依も握り返してきたのを見てから、そっと乳輪を舐めた。

「んふ、う、っ、っ...！」

きゅっと目をつむって息を詰めている陽依が、声を我慢してそうになっているのか、セックスの時は控え目なタイプなのかを、俺は知らない。だから、声を出してもいいと言おうと思ったけれど、今はやめておいた。俺は陽依に無理強いをし

たくない。やれば良いと、体のいい口実でコイツを弄んで、振って捨ててきた男とは違うのだから。

ほんのり色づいてきた乳首に、ふう、と軽く息をかけてみた。すると陽依が、びくんと背を反らして、口元に握っていないほうの手を当てる。

「はう...ッッ！！？ん、っ、ひ、ひうっ」

「気持ちよかった？」

「や、あ、俺、俺っ」

「胸、すごいドキドキしてるな。まだ緊張してるのか」

「だ、だって、司が俺の胸、舐めてるって思ったら...！」

「...胸だけ舐めて、終わりじゃないのに？」

「っっ！！！」

露骨に感じた反応をした陽依に声をかけると、彼は顔を真っ赤にして唇を震わせていた。初めて見る彼の表情に、つい俺も興奮してしまう。そうか、陽依は行為の最中に恥ずかしくなると、こうやって赤面して黙ってしまうのか。図星なのも分かりやすくいいと、ふと笑みがこぼれてしまう。でもからかっているのだと思われたくはないので、俺はまた胸を責めることに集中する。

そしてこれも新たな発見だったが、陽依は乳首でも強く感じていて、吸って舐めると、甘い声を漏らして悶えていた。小さい時ならじゃれ合いで触ることもあったが、さすがに20を超えた男同士で乳首をいじることはなかったので、新しい陽依を知れて嬉しい。

尖らせた舌で、下から上に向かって突起を弾くと、一緒に腰が浮く。それを恥ずかしそうに、元の位置に戻すのがかわいい。なのに気持ちよすぎると怖くなるのか、ぐっと左右に身体をねじってしまう。そこで口を離さずに反対の乳首をつねると、ひねった腰を更にくねらせて声を上げていた。

「ふぁ、あ、ッ、んんんっ！んや、ああ、だめ、だめえ...ッ！！」

本当の制止とは程遠い「だめ」の声に、俺も増々たぎっていく。エロい、想像以上に。俺はずっとずっと陽依を思っていたけれど、こっそり想像もしていたけれど、本物は段違いだ。

じゅう、と最後に強く吸ってから、乳首から口を離した。見下ろした先の陽依は、くたりと床に身を預けて、目をつむって息をしていた。

「んは...、あ、あ、あ...」

はぁ、はぁ、と呼吸をするたびに、さっきまでいじめていた胸が上下する。その光景すらエロくて、俺は一人唾をのんでいた。

なんだかたまらなくなって、濡れる唇にキスをする。そのまま握った手もほどいて、彼のズボンに手をかけた。サイズが合わないせいで簡単に脱がせることができるズボンも、下着も、何もかもをかかとまでおろす。そして片足を引き抜いて、自由になった両足を大きく広げた。

「っ、や...！そ、そんなに見ないでよっ」

電気を消すことも忘れて行為に至ったので、陽依の局部は蛍光灯に照らされてよく見える。白い肌には、毛のひとつも生えていなくてきれいだ。旅行や部活で風呂に入ったときに見えてはいたが、ここまでじっくり見たのは初めてなので、改めてそう思う。

大学に入った瞬間からバイト代を美容につぎ込み、足しげく脱毛に通っていたので、もう今では髪の毛以外に毛の生えているところなんてないのかもしれない。恋愛体質な彼いわく、愛される身体づくりは大事らしい。気にかけている分、いっそ女よりも綺麗な身体をしている。でも、それを元カレ連中が汚したと思うと腹が立つ。そして何より、この美しい身体の内側も、俺ではない別の誰かの為に準備されていたと思うとイライラが加速する。

とはいえ、俺の気持ちをそのまま表現してはダメだ。あくまで愛情だけを、ひたすら陽依に注ぎ込まなくては。

「エロい身体してる。すごく綺麗だ」

「そっ、そんなことないよ」

「触り心地もいい。全部舐めたい」

「やっ、いい、もう舐めなくていいから！」

「じゃあ触る」

「んわ、あっ！」

彫刻よりも滑らかな肌に手を滑らせると、それだけでも癒される気がした。抱きしめると、彼の体温が伝わってきて気持ちがいい。ずっと抱き合っていたい気分になる。

だが、俺はそれで満足でも、陽依を甘やかすうえでは抱きしめるだけでは足りない。だから、嫌だ嫌だと言うくせにしっかり勃起している中心部も、しっかり愛でてあげなくては。

相手が俺で、その上酒も入っているから、実は勃起しないのではと少し不安だったが全くの杞憂だった。陽依が感じていると分かると安心する。だから彼の先走りを手に絡めて、ゆっくり熱を擦った。

「っ、ふ、う、ううっ」

「気持ちいいか？」

「っ！っ！！」

言葉を少なく、頷くだけで感じている意思表示をする陽依は、なんだか切羽詰まっている気がした。それがどんな意味かくみ取れなかった俺は、リラックスしてもらおうと彼にキスをする。

「っふ...！？ん、んう、っ、ツッ！！！？」

「ん、陽依、かわいい、かわいいな...」

「んふ、っ、ふぐう...！！うう、ツん、ンン~~~~.....っっっ！！！！」

けれど溶かすつもりでキスで追い打ちをかけてしまったのか、ぐぐ、と喉を反らした陽依は、予期せぬタイミングで俺の手に精を放っていた。

ぱた、と手のひらからこぼれて陽依の肌に散っていった白濁液をそっと撫でると、陽依は顔を真っ赤にして、ぱっとティッシュに手を伸ばす。それからあわてて、俺の手を先に拭き始めた。

「わっ、わっ！！ちょ、ごめん、俺気持ち過ぎて、イっちゃって」

「別に謝ることじゃない」

「う、い、いたたまれないの！分かってそこは！はい、これでちゃんと手拭いてね！」

だが、一度イッた陽依はさっきまでのとろけた顔から、普段の恥ずかしがる陽依に変わってしまった。なんだよ、せっかくかわいかったのにと、俺は少し不満に思う。でも、しっかり感じてイってくれたのは嬉しい。

だけれど、もう俺たちは大人だ。こんなままごとみたいな手コキでは、一人でしていると変わらない。きっと陽依が真に求めているのも自慰などではなく、二人でしかできないことだ。だから身体を拭いている途中の彼を抱きしめて、この先も提案した。

「陽依。嫌じゃなければ、俺の部屋で続きしよう」

「つ、続きって」

「ここも気持ちよくなってほしい」

「う、あ...！」

すり、と尻をひと撫でするだけで、陽依の体温がぐっと上がった。そのまま無言で、ぎゅっと俺にしがみついて離れなくなってしまう。おそらく、俺の言った続きを想像して、一人で高まってしまったのだろう。

ちゅ、と彼の耳の裏にキスをして、丸く固まった陽依を抱きかかえる。それから寝室に移動して、彼をベッドの上に横たえた。

さすがにリビングとなるとなんの道具も置かれていないが、ここならローションもゴムもある。挿入に適した環境を作れるように、今度は部屋も薄暗くした。けれど、これで安心してできるなと陽依に手を伸ばしたら、彼は布団を握って身体を隠してしまった。

「あの、さ？司、無理してない？全然俺、今日一緒にいてくれるだけで嬉しいよ？だから、ここまでしてくれなくても…」

「陽依は、俺とするのは嫌か？」

「やっ、嫌って言うか、そもそも司は俺じゃ興奮しないと思うし」

「…これ触っても、それ言える？」

「っ、あ…！」

陽依はどうやら、まだ俺が慰めるための意味合いで彼に触れていると思っているらしい。もちろん、陽依を甘やかして元気づけたい気持ちもある。けれどありあまる下心を隠せない下半身は、恥じる彼を見るだけで痛いほどに張り詰めていた。

隠しようもない興奮の証に、陽依の手を導く。触れた瞬間に俺の状態を悟った陽依は、声も出せないほどに驚いていた。ぱく、ぱく、と口を開閉させてから、大きく開いた目で俺を見上げる。

「嫌じゃないって分かった？」

「ッ！！」

暗い部屋でも、陽依が今日一番顔を赤くしているのが分かる。その額にキスを落としてから、布団をはいだ。よけた布団に陽依の手が伸びなかったので、俺は彼の秘部を触る許可を得たのだろう。陽依から深い部分を知のことを認められたようで、俺の中でぞわりと雄の部分が満たされた感覚がした。

ただし彼から許されたとはいっても、無理やりする気は全くない。陽依はこの場所を自分で準備をしたらしいが、まずはゆっくりほぐすところからだ。手始めにローションを纏わせた指を1本入れて、彼の中を広げていく。

「ん、う...っ！」

「痛くないか？」

俺の問いに対して、こくこくと頷いて返事をする陽依は、いつもの彼とは対照的に静かだ。それが彼の本来のもののか、それとも俺の前で取り繕っているのかが、見抜けなくて悔しい。そして何より、指1本を難なく受け入れていく身体が、俺の知らない陽依の大人の部分な気がして妬けてくる。それでも俺は、あえてゆっくりと広げていくつもりだった。彼の負担にならないよう、丁寧に指を動かす。

けれども俺の気持ちとは反比例するように、陽依はどこかもどかしそうだ。

ふう、ふう、と物欲しげな目で俺の指が入る場所を見つめて、切なそうな息を吐く。

「ふ、うう...！ん、はぁ、はぁ...！」

「陽依、なんかもどかしそうだ。足りない？もっと？」

「ッ！！」

あまりにも見え見えの仕草に、つい俺は陽依の気持ちを代弁してしまった。すると彼は、かっとな頬を赤らめて、何とも言えない顔で俺を見つめてきた。それから泣きそうに眼を潤ませて、下唇を噛む。

彼の心境としては、俺が言ったことは凶星なのに、あっさり見抜かれて恥ずかしい、といった感じだろうか。だけれど、恥じらうわりに俺の言葉を否定もできず、素直に欲しいとも言えない陽依は、ひどくいじらしくてかわいく思う。

愛しさが溢れて、つい目元にキスをしていた。ふる、と軽く震えた陽依は、閉じていた目をゆっくり開いて、俺を見つめてくる。そのまま膝を器用に動かして俺を足の間に招き入れるのは、男としてぐっとくる仕草だった。

俺とは違って大きな目が、暗い部屋の中で輝いて見える。本当にかわいい。大人になっても愛嬌のある陽依が、俺と同年とは到底思えない。なのに身体は年相応か、それ以上にエロくなっている。そんな陽依のアンバランスさに、俺はただひたすらにそそられていた。

求められるままに2本目の指を入れると、陽依はたまらずうっとり息を吐く。その吐息が胸を撫でるだけで、俺の心臓が羽でくすぐられたように疼いた。

「んあ、あ、あっ、ッ、んん！」

「2本で足りるか？もっと増やす？」

「っ...、や、あ、あっ」

「増やした方がよさそうだな」

「ひううっ！」

難なく3本も指をくわえこむそこは、同じ男の孔とは思えないほどいやらしかった。ローションで濡れていると分かるのに、指の動きに伴って溢れてくる様子はまるで愛液のようで、ぐちゃぐちゃと音が鳴るのも卑猥だ。何より温かな壁が指を締め付けてくるのも、陽依との行為に現実味を増していていい。

ただ、俺が視覚的に興奮している一方で、陽依が気持ちいいと思っているかは未知だった。一応、男にも感じる場所はあると聞いたが、実際どうなのだろうか。どこにあるのか分からない俺は、痛みを与えないように、そっとそっと陽依の中でいい場所を探した。その努力のかいあって、陽依の反応が変わる場所を発見する。性器の裏側にある、しこりのような一点。ここを擦ると、彼の声が上ずる。

「っく、んあぁっ！あう、ッ、や、あ、だめ、司、そこやだぁ...！」

「嫌？俺には気持ちよさそうに見えるけど」

「ん、ふっ、うううっ！ち、違う、よくなりすぎて、だめにっ」

「俺は陽依によくなってほしい。痛くないなら、やめない」

「うっ、うゝ うっ...！ひう、ッ、は、はっ、だめ、ああ、も、んうう...っ！や、なんで上手いのっ！ッ、あゝ、あ、んっ、司の指、えっち過ぎるってえ...！あ、や、ああだめだめだめえっ！！」

ぬるぬるとしこりを3本の指の腹で撫で上げると、随分と色気を含んだ喘ぎ声で鳴くようになった。だめ、だめ、と言いながら隠せない中心をそそり立たせる陽依のちぐはぐさに、胸が高鳴る。もっと気持ちよくしたい。今も溶けている彼を更にとろけさせたいと、指をうまく動かして、集中的に弱点を責めあげる。

けれど、俺は楽しくても陽依はそうでもないらしい。かわいく喘ぐ彼を見ていたら、突然腕で顔を隠してしまった。どうしてだ、俺は見たかったのにと、俺は陽依の腕をさすって問いかける。

「陽依？なんで隠すんだ。部屋も暗くしたのに」

「だって...！司、めちゃくちゃ見てるっ！こんなの恥ずかしすぎて、無理...！」

「俺は見たい」

「無茶言うなよお...」

だが、俺の意見を主張しても、陽依は頑なだった。それを残念に思うが、彼の拒否を遮ってまで自分の我儘を通す気はないので、言葉での説得は諦めよう。かわりに彼の反応からして、感じているのは間違いないようだ。だから、言葉ではない方向からアプローチをかける。

しつこくしつこく陽依の内部にある弱い場所を刺激するうちに、とんとん、と叩くように擦るのが好きだということが分かった。なので、人差し指と薬指で軽く

しこりを中心に押して、浮き出た部分を中指で叩くように擦りあげてみた。これ
がかなりはまったようで、ぎゅうう、と中の締め付けを強くした陽依は、腰から
下を左右にくねらせて暴れ出した。

「う、あ、ああああっ！んは、う、うっ、んんっ！あ、あ、だ、だめ、それだ
めええ...っっ！！」

「好きそうだな、これ」

「っ、ひ、う、や、やだっ...！んっ、く、ッ、言わない、で、あ、ふ、ッ、ん、
んんんうっ！？」

あからさまに悶えだした陽依のしこりを、次は強く押し込んでみる。快感に連動
して、ぱんっと腰が上がるのが楽しい。ひとつひとつの刺激に敏感に反応をして
くれる陽依を、俺はどこまでも愛でたい気持ちだった。

彼が飽きないように、甘い刺激と、強めの刺激を織り交ぜて責めていく。時にじ
れたい速度で撫でて、物欲しそうな気配を感じたらバラバラの指で揉みくちゃ
にする。でも高まってきたところで止めて、またじれたいものに。それを繰り返
返して学習させてから、あえて強い刺激を過度に続けてみる。

「ひう、あ、ああああ...！んんあああっ！？やっ、え、う、ううううん
んっっ！！？ああ、それだめ、あああ無理無理無理いいっ！！」

陽依が無理だと言って暴れても、ローションを足して、潤いを保ちながら指を動
かした。きっと痛くはないはずだ。気持ちいいなら続けようと、彼を感じさせる

ために全力を注いだ。すると、とうとう顔にかかっていた腕が外れて、かわりに陽依の手が俺の服を握りしめてくる。

「うあ、ああああっ...！つ、かさ、も、もお、だめッッ！！もうだめえっ！！」

「何がだめ？」

「ひっ、う、ッ、んんううっ...！！は、はひ、う、イッ、ちゃ、うう...ッ！後ろでイッちゃうからあっ！んふっ、ふっ、ッ、それ、もうしないで...ッッ！」

だが、切羽詰まった陽依の言い分ときたらどうだ。お尻を指で弄られて、イキそうになるから止めてほしいだなんて。それを言われて、止められる男がいるなら今すぐこの場に連れてきてほしい。もちろん俺も、止められない派の一人だ。当然指は動かすに決まっている。

そうはいっても、陽依の抱える不安は取り除いてやりたい。だから俺は彼を抱き寄せて、どんな陽依であっても受け入れることを伝えた。

「大丈夫。陽依が気持ちよくなってくれたら、俺は嬉しいから。このままイッてほしい」

「...っ！や、あ、ま、待って！んあ、ダメダメ、まっ、あああうううっ！！？」

より密着感を高めるため、俺は陽依の横に寝ころがって、頭ごと抱きかかえた。首の下から腕を通し、ぐっと自分の方に引き寄せる。入れたままの指は、くにくにとしこりを揉んで、甘い刺激を送り続けた。

「はうっ！ッ、ああ、だめ、だめえええ...っ！！」

「ううん、ダメじゃない。我慢しなくていいから」

「んひ、ッ、あ、あう、う、あ、や、あゝ...ッッ！！ひ、い、イク、だめ、
や、ああ、イツちゃ、あ、あゝ あああううっっ！！！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー